

## 【一般演題2】 第8席

## 『鍼灸経穴彙解』の検討

東京 北江 瀧也

水戸藩官医原南陽が享和三年（1803年）に発刊した『経穴彙解』八巻は、江戸期経穴学の隆盛を受けた後期の精華であった。この『経穴彙解』に祖本があることは、その序文により知られていたが、今回その祖本であるとみられる『鍼灸経穴彙解』という手稿本、上下巻を検討する機会を得たので、いくつかの点について述べる。

『鍼灸経穴彙解』と題されたその書は、序によると天明三年（1783年）の撰述となっている。刊本に先駆けることちょうど二十年前である。

撰者原南陽（1753～1820）は、名を昌克、字は子柔、玄與と称した。南陽はその号、水戸の人である。南陽は京都に遊学し山脇東門に本道を、賀川玄悦に産科の術を受けた。鍼灸は専門ではないが、『経穴彙解』の功績により鍼灸学史に欠かせぬ人となった。

もともと『経穴彙解』は陸奥守山侯の儒臣、戸崎淡園が盲の季子のために撰述したものである。その季子の夭折により顧みられなくなったものを、甥の南陽が譲り受け増補訂正したものである。

『鍼灸経穴彙解』『経穴彙解』の経穴配列はともに『甲乙経』のそれに従っており、当時流行していた『十四経發揮』方式を採らない。このことは『経穴彙解』の眼目であり、『十四経發揮』への、ひいては1700年代後半から1800年代初頭当時の鍼灸家への批判的意味もある。

さらに『経穴彙解』の改訂に伴い、奇穴が第八巻にまとめられている点が、『鍼灸経穴彙解』との大きな相違である。引用書目は、十九冊から二十八冊になったが改訂に伴い、『銅人図経』『註證發微』『筋骨銅人図』の三冊は削除されている。

本邦の本格的な経穴学研究書の系譜は、饗庭東庵『経脈發揮』（1668）→堀元厚『隧愈通攷』（1744?）→原南陽『経穴彙解』（1803）→小坂元祐『経穴纂要』（1810）と続く。

いまだ未解決といえる経穴の諸問題に対し、研究の一手順を『経穴彙解』に求めるのは、今日的意味をもつといえよう。